



吉田 道雄

熊本大学教授

行動としてのリーダーシップ

■リーダーシップ・チェックリスト

筆者の手元に“リーダーシップ”を完璧に測定できるチェックリストがある。その完成までに30年の歳月を要したが、その信頼性には

絶大なる自信をもっている。リストに含まれる項目はわずか30問で、3分もあれば誰でも回答できる。リストの作成にあたり、“リーダーシップの善し悪しは、リーダー自身の資質で決まる”という前提をもとに、膨大なデータを収集した。その結果、リーダーシップが“3つの因子（柱）”からできあがっていることが明らかになった。それぞれの因子に対して各人の回答は“プラス反応”か“マイナス反応”に分類される。この3因子すべてが“プラス反応”であれば“タイプA”，2因子の場合は“タイプB”，1つの因子のみだと“タイプC”と呼ぶ。もちろん“タイプA”こそが期待されるリーダーであり、組織にも望ましい結果をもたらす。これが“タイプB”“タイプC”になれば、その“望ましさ”は低下する。しかし、それでも“プラス反応”なのだから、リーダーとしてそれなりの評価を受ける資格は十分に備えている。したがって、世の中にこの3つのタイプのリーダーしかいなければとくに問題はない。しかし、誰もが推測するように、“マイナス反応”を示す人たちもいるのである。そして、“マイナス反応”が1個であれば“タイプD”，それが2個，3個と増えると“タイプE”“タイプF”と呼ぶ。こうした人たちがリーダーとして問題を抱えていることは疑いない。とりわけ“タイプF”ともなれば、まさに“リーダー失格”の烙印を押されたも同然である。

ところで、読者はこのチェックリストを受けてみたいと思われるだろうか。筆者は講演会でこのリストの話をしたときは、「さあ皆さん、この調査を受けてみたいと思われる方は手をあげてください」と呼びかける。これまでの経験では、比較的若いリーダーたちの中には手をあげる者もいるが、経験豊かな管理職になると躊躇していることが手に取るようにわかる。それも当然で、下手をすると“リーダーとして不適格”といったラベルを貼られるか

